

都市近郊湿地における 市民活動の継続性に関する研究 —新潟県福島潟を対象として—

1X20D003-6 浅野圭音*

本研究では、新潟県福島潟において20年もの長期に渡って続けられている市民活動団体に着目し、団体の継続性と個人の活動参加の継続性という2つの観点を踏まえて都市近郊湿地である福島潟における市民活動の継続性について明らかにすることを目的とする。文献調査、団体へのインタビュー調査から活動実態の把握を行うとともに、活動メンバー個人を対象としてアンケート調査を実施した。その結果、個人の継続プロセスに関しては、福島潟に対する思いを基にした活動を経て[メンバー間で得意分野の多様性を理解]することによって継続するということが明らかになった。また団体の継続性としては発起人の思いが引き継がれることがポイントであることが明らかになった。以上より、都市近郊湿地である福島潟の市民活動の継続性は、都市における人と自然の関係性が市民活動によって構築されているだけでなく、人と人との関係が自然を介して生まれていることが推察された。

Key Words : 地域コミュニティ, 市民活動, 継続性, 都市近郊湿地, 福島潟

1. 序論

(1) 研究の背景

我が国では明治以降で土木技術をはじめとする近代的科学技術によって、自然災害を克服してきた一方で、人々は自然から乖離して日常的な活動を行うようになり、人と自然の関係性は希薄になっている。河川工学者の大熊¹⁾によると、特に現代の都市部においては顕著であるため、地域の自然に根差した「都市の自然観」をつくりあげ、共有する必要があるとされている。

また現代の都市部においては、居住環境の変化や核家族化等を背景に人と人との関係性の希薄化が問題となっている。そうした中で地域に根差した人との関係性を構築するものとして市民活動が存在する。

内閣府のデータによると、市民活動団体(NPO法人)は年々増加し、全国で活動が展開されている²⁾。このように市民活動の気運が高まっている中で、全国のNPO団体の約9割がコロナによって活動の停滞や休止等の組織運営の継続に影響を受けている³⁾。

以上の背景より、本研究ではコロナ禍を経て20年以上市民活動が続いている新潟県福島潟を対象として、団体と個人の継続性の両者から活動の継続性に着目する。市民活動が継続していく上で、市民活動の母体となる組織全体が継続すること、またその組

織に属する個人が継続的に市民活動に取り組むことが求められている⁴⁾。

また内山⁵⁾の研究では、福島潟を対象として、都市近郊湿地における市民活動が一般市民に対して担う役割を明らかにした。そして本研究は、内山の継続研究として位置づける。

(2) 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究では都市近郊湿地である新潟県福島潟において約20年間に渡って続けている市民活動を対象として、コロナ禍を経た現在の活動実態を、内山⁵⁾が整理したコロナ禍以前の実態と比較しながら把握する。また、活動に対する思いや参加動機等の内面から活動メンバー個人の活動参加の継続性を明らかにする。さらに、活動実態と活動に対する思い等のインタビューデータから団体としての継続性を明らかにする。

以上より、個人と団体の継続性という2つの観点を踏まえて、都市近郊湿地における市民活動の継続性について明らかにすることを目的とする。

(3) 既存研究の整理

本研究に関する既存研究について、a) 市民活動の継続性に関する研究、b) 土木計画学分野における地域活動に関する研究、c) 福島潟の市民活動に関する

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

研究の3つに大別することができる。

a) 市民活動の継続性に関する研究

市民活動の継続性に関する研究として、藤澤⁶⁾は、長期継続的な市民活動に関する調査研究及び日本の自然環境保全活動の歴史的展開を概観し、長期継続要因を明らかにした。山村⁷⁾は、諏訪湖の清掃を38年に渡り続けている下諏訪町の団体に着目し、活動の長期継続の要因を明らかにした。羽鳥ら⁴⁾は、市民活動の参加状況やその活動期間の実態を調査し、市民活動の持続可能性の規定要因を明らかにした。

b) 土木計画学分野における地域活動に関する研究

上村ら⁸⁾は、地域活動団体に着目し、地域活動同士の交流という観点で活動場所のあるべき姿を考察した。藤原ら⁹⁾は、遠郊外住宅地において比較的活発な近所づきあいの特徴と地域活動の相互学習による多世代型交流社会の構築の可能性を検討した。

c) 福島潟の市民活動に関する研究

佐々木ら¹⁰⁾は新潟市内の福島潟と佐潟における人との関わりを捉えるために市民活動の概要と特徴を整理した。渡邊ら¹¹⁾は、福島潟の整備と維持管理の背景を把握した。多様な市民活動の調査からは各活動の性質と場所の差異に着目し、福島潟を訪れる主体への体験アクセスに差があることを明らかにした。内山⁵⁾は、市民活動と対外的関係性の変遷を概観したうえで、福島潟における市民活動を、第I期(1997年から2004年)、第II期(2005年から2013年)、第III期(2014年から2020年)に区分し、第I期では市民活動の拠点となる空間の整備、第II期では潟の文化を発信し普及する市民活動の展開、第III期では潟の利活用を目的とした市民活動が展開されていることを明らかにした。さらに、市民活動の役割を、「環境関与型」、「体験学習型」、「風景体験型」、「産物享受型」の4つに分類した。

本研究では、内山の継続研究として、現在の福島潟における市民活動の活動実態を把握する。既存研究のように個人や活動単体としての継続性を明らかにするのではなく、市民活動団体の継続性と個人の活動参加の継続性という2つの観点から活動の継続性を考察する点に独自性があるといえる。

(4) 研究の構成

本研究は、文献調査とインタビュー調査から市民活動の実態を明らかにする。また、個人の活動参加についての語りに着目し、インタビュー逐語録を修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(以下、「M-GTA」と表記)に基づいて分析を行い、個人の活動参加の継続性の構造を明らかにする。さらにアンケート調査によって得られたデータから継続性の構造

の確認を行う。そして、インタビュー調査より団体の継続性について整理し考察する。最終的に団体の継続性と個人の活動参加の継続性を統合し、福島潟の市民活動の継続性について考察する。

2. 研究対象の概要

(1) 福島潟の概要

福島潟は、新潟県新潟市北区と新発田市の市境にまたがって位置する淡水湖であり、新潟市内にある13個の潟の中でも最大の面積を持つ。福島潟南東部の五頭山脈、笹神丘陵を水源とする13本の河川が流入しており、新井郷川や福島潟放水路を介して日本海に流出している。

江戸時代に開削された松ヶ崎堀削をきっかけに福島潟の干拓の歴史が始まる。1966年から国営福島潟干拓建設事業によって169haが干拓され農地となり、1855年には540haあった潟面積が193haの大きさになった。現在は河川改修事業によって干拓地の一部が潟に戻り、262haになった¹²⁾¹³⁾。

また、国の天然記念物であるオオヒシクイの日本一の越冬地であり、オニバスの国内の北限としても知られている。加えて観光交流施設「水の駅ビュー福島潟」、潟の動植物の観察ができる「自然学習園」、ヨシ葎き屋根の休憩交流施設「潟来亭」、野鳥等の観察施設「雁晴れ舎」等の施設がある。

(2) 調査対象団体の概要

2023年現在福島潟では13団体が市民活動を行っている。その中でもNPO法人ねっとわーく福島潟(以下、「ねっとわーく」と表記)の部会とねっとわーく以外の市民活動団体の2種類に分けられる。

ねっとわーくとは、福島潟を代表とする市民活動団体であり、ねっとわーく以外の市民活動団体の中には、発足当初はねっとわーくの部会の1つとして活動していたが、後に独立した市民活動団体も含ま

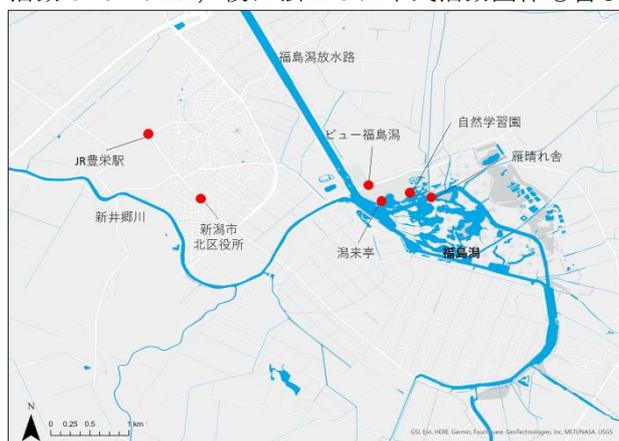


図-1 福島潟周辺図

れる。本研究では現在も行われている13個の市民活動のうち、インタビュー調査を行うことができなかったオニバス63会を除く12団体を対象とする。また、ねっとわーくは2014年から2023年まで施設の指定管理を行っており、2024年からは別の団体が行う。

3. 対象団体の活動実態

(1) 調査概要

福島潟の市民活動の実態把握のために、文献調査と訪問によるインタビュー調査を実施した。インタビュー調査の概要を表-1に示す。調査対象組織の選定にあたり、内山⁵⁾の研究を参考にし、現在も存在している12の市民活動団体の関係者にインタビュー調査を実施した。また、内山の研究は2020年時点での活動実態を整理しているが、本研究では内山の研究では言及されていない団体を含めコロナ禍(ここでは2020年4月から2021年9月までの期間を指す)を経た現在の活動実態の把握と整理を行った。

さらに、活動メンバー個人の活動状況や活動に対する思い等を詳細に把握するためにアンケート調査を実施し、概要については表-2に示す。

(2) 各団体の活動の実態把握

各団体の活動の設立年、設立経緯、目的、活動内容、活動資金、頻度、コロナ禍の変化等について表-3に示す。また活動の写真を図-2～図-5に示す。

表-1 インタビュー調査の概要

調査方法		インタビュー調査(半構造化)		
対象者・実施日・調査時間	組織名	調査対象者ID	実施日	調査時間
	かたごほんの会	A	2023/7/16	1時間
		B		
		C		
	潟舟の会	D	2023/8/21	1時間
		E		
	よるぶち文化の会	F	2023/9/22	41分
		G		
	福島潟まこも歌う会	H	2023/9/22	15分
		I		
	福島潟野鳥の会	J	2023/9/22	1時間16分
		K		
	鳥形会	K	2023/9/22	1時間10分
	植物観察同好会	L	2023/9/22	50分
	福島潟映像倶楽部	M	2023/9/23	37分
ときことビクニック隊	N	2023/9/23	20分	
福島潟めぐみの会	O	2023/9/24	57分	
	P			
	Q			
豊かな自然学習園をつくる会	R	2023/9/24	1時間34分	
ヨシあし和紙の会	S	2023/9/25	21分	
内容	活動内容・活動目的・人数・活動頻度・コロナ前後の変化・助成金の有無・活動に対する思い・今後について等			
データの取り扱い	インタビュー内容をボイスレコーダーで記録したのちに、書き起こしを行った			

表-2 アンケート調査の概要

対象者	福島潟の市民活動の活動メンバー
配布方法	ねっとわーくの代表の方に郵送し、対象団体に配布依頼
回収方法	返信用封筒
配布日	2023年10月22日
締切日	2023年11月16日
配布数	50部
回収率	20% (回収数 10部)

4. 市民活動の継続性

(1) 個人の活動参加の継続性

a) 分析方法

個人の活動参加の継続性を明らかにするために、インタビューで得られたテキストデータを木下¹⁴⁾によって考案されたM-GTAで分析を行う。M-GTAとは、継続的比較分析法による質的研究で生成された理論である。具体的な分析手順としては、分析テーマを福島潟の市民活動の継続プロセスに関する研究、分析焦点者を福島潟の市民活動で活動している人と設定し、テキストデータから独自の概念と定義を作りワークシートに記入していく。その際に概念間の関係などを理論的メモに記入し、概念のまとまりであるカテゴリーを生成していく。最終的にはそれらの概念・カテゴリーで構成された関係図が分析結果として提示される。

b) 分析結果の説明

分析を行う上で、被調査対象者Lは現在活動を行っていないため、Lを除いたインタビューデータを用いて分析を行った。生成された概念とカテゴリーを表-4に示す。また概念・カテゴリー間の関係性を図-5に示す。この関係図より、福島潟における個人の活動参加の継続性は、以下のストーリーラインによって説明される。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、概念を〈〉で表記する。

福島潟における市民活動の個人の継続プロセスは、〈潟文化を伝えたいという思い〉や〈潟の動植物の保全に対する考え〉のような【福島潟に対する思い】がベースとなって【団体での活動】が行われる。その中で、〈他地域の視察・学習〉を行い、〈活動での個人的目標〉が生まれ、《活動団体の運営》を行っていく。そして活動を通して、【活動に対する誇り】が芽生え、【人との交流】による楽しさを実感し、【福島潟という環境認識】するようになる。そして【メンバー間で得意分野の多様性を理解】し、メンバーを尊重しながら活動を行っている。

表-4 生成された概念とカテゴリー

カテゴリー名	サブカテゴリー名	概念名	定義
福島潟に対する思い	-	潟文化を伝えたいという思い	潟の文化を後世に伝えたいという思いを持っていること
	-	潟の動植物の保全に対する考え	福島潟の動植物を保全するための考えを持っていること
団体での活動	活動団体の運営	サポートメンバーの存在	手助けしてくれるメンバーがいること
		リーダーを決めない自由な活動形態	リーダーを決めずに指図されることなく自分のやりたいことをやること
	-	柔軟性	できることをできる範囲で活動すること
	-	他地域への視察・学習	他団体や他地域に行つて積極的に学んでいること
-	-	活動での個人的目標	個人的目標を持って活動すること
活動に対する誇り	-	福島潟の生物を活かした活動に対する誇り	福島潟の生物を活かしたこだわりをもって活動すること
	-	活動に対する誇り	自分の活動に対して誇りを持っていること
人との交流	参加者との交流	参加者からの反応	活動内の参加者からの反応が嬉しいこと
		多世代交流	世代を超えた交流があること
	メンバーとの交流	活動外での交流の場	活動以外の関係性を構築する場があること
		共同活動の楽しさ	メンバーみんなで一緒に楽しんで活動すること
福島潟という環境認識	環境の変化	自然のサイクルと経年変化	自然のサイクルと動植物の経年変化を実感すること
		人工的な自然変化	人間が手を加えたことによる環境の変化に気づくこと
	-	風景体験	福島潟の風景を体験すること
メンバー間で得意分野の多様性を理解	-	メンバー間で得意分野の多様性を理解	メンバー間で得意分野が異なることの多様性を理解すること

表-3 福島潟における市民活動団体の概要

組織名	設立	設立経緯	活動目的	活動内容	構成メンバー	活動資金	活動頻度・時間	他団体との繋がり	広報誌の有無	コロナ禍の変化
豊かな自然学習園をつくる会	1997	豊栄市が自然学習園内に造成した「自然観察実験池」の造成・運営を行うため、開園に向けて組織化して始まった	湖の再生にとって有用となる研究・増殖・観察・実験を行う環境を整備するため	自然学習園の管理運営を行う	14名	新潟市からの委託金・東洋タイヤ等の助成金等	毎週土曜日 9時～12時	○	×	散歩する人が増え、そこからメンバーになる方が2,3名いた
潟舟の会	2006	「潟舟」復活委員会が発足し、名前を変えて始まった	伝統的な潟舟である「12秩舟」を復活させ、子どもたちに潟遊びの楽しさを伝えるため	潟舟の制作と潟舟案内を行う	4名 (平均年齢は70歳超え)	参加費 (大人500円・子供200円)・助成金等	ゴールデンウィーク期間と夏休み期間	○	△	1年間だけ休止し、その後マスタックの着用・検温・手袋の着用を義務付け、人数制限を設けて実施
福島潟めぐみの会	2007	ビュショップで販売する商品を作成するために始まった	ビュショップで販売する福島潟らしい商品を作成するため	福島潟で採取できる潟のみくみ(植物)を活用して商品作成をする	4名+お手伝い	ビュショップでの売り上げ・視察や焼きごとの購入等は、雇われ活動補助金を利用	毎週水曜日・不定期	○	×	なし
よろぶち文化の会	2014	発足当時の代表の方が、潟来亭を活用するために始めた	福島潟周辺にたつた自然文化について、その伝承に寄与するため	潟来亭にて、湖で採れた蟹や野草を用いた湖の料理をいただき、アコーディオンに合わせてメンバーが作詞作曲した歌を歌う	約5名 (参加者は20名程度)	参加費500円	毎月第3火曜日 18時～21時	○	×	潟来亭で食事提供ができなくなったため、休止中
植物観察同好会	2009	福島潟に存在する在来植物を覚えてもらいたいという代表の思いから設立された	福島潟に存在する在来種の植物を記録し、保全するため	福島潟の貴重な植物の保全を目的に植物の分布や個体の調査を行う	約10名 (つくる会のメンバーが中心)	基本活動はなし 図鑑製作の際には補助金を利用	毎月第3日曜日 9時から	○	×	なし
福島潟まこも歌う会	2018	歌が好きなお客が集まって始まった	コーヒショップ「まこも」でコーヒやカレーを食べ、地域のひととの交流を図るため	ビュ福島潟3階コーヒショップ「まこも」にてアコーディオンに合わせて叙情歌等を歌う	約8名	なし	毎月第2日曜日 13時～15時	○	×	ビュ福島潟から許可が下りず、休止中
福島潟映像倶楽部	2020	団体の代表が福島潟での活動を再開した際に、新しく団体を設立した	ビュ福島潟2階にある高性能の湖カメラを活用するため	湖カメラをはじめとする福島潟の映像をYouTubeとInstagramを更新する	約5名 (20代から60代)	なし	不定期	○	×	メンバーが集まることで、1人で撮影を行っていた
福島潟ヨシあし和紙の会	1997	ビュ福島潟の要請により、福島潟ヨシあし和紙の会とよくなる会が一本化し、発足した	これから先の未来を担う子どもたちにヨシの良さを伝えていくため	福島潟で採れたヨシを用いて和紙の商品をつくる活動	10人 (60代から80代)	ビュショップでの売り上げ	毎週火曜日と土曜日	×	×	なし
かたごはんの会	2005	市民が福島潟の自然の中で過ごす時間の良さを体験してもらうために始まった	市民が気軽に福島潟に足を運べる機会を作り、福島潟の素晴らしさを体験していただき、福島潟を舞台に市民が活躍できるような繋がりを築いていくため	月に1度、朝に福島潟をお散歩して地元食材を使ったご飯をみんなで食べる活動	11名	参加費 (大人300円・子ども200円)	毎月第3日曜日 7時～9時	○	△	活動を休止しており、メンバーのみで散歩を行っていた
福島潟野鳥の会	1997以前	不明	福島潟の野鳥を観察、記録するため	湖の野鳥の観察を行っている	不明	なし	11月から2月の間の毎週日曜日	○	○	なし
鳥彫会	1992	ビュ福島潟の問題のタイミングで、当時の館長から5階に展示する鳥の作成を依頼されたことから始まった	不明	福島潟の野鳥をモデルにバードカービングにて、野鳥の木彫りの商品を作成する	約10名 (福島県や長野県の方もいる)	会費：2000円 (福島県やバードカービング教室参加費：1000円)・雇われ活動補助金	第3日曜日 13時～16時30分	×	×	なし
ときこトニック隊	2006	加藤登紀子がビュ福島潟4代目名譽館長になったのが縁で始まった	加藤登紀子と福島潟の魅力をPRする活動をサポートするため	4代目名譽館長の加藤登紀子と福島潟の活動と、名譽館長事業の活動をサポートする	約20人 (新潟市内の加藤登紀子ファン)	年間活動費 (大人2000円、小学～高校生500円)・水鏡作曲では雇われ活動補助金	不定期	○	×	自然文化祭で滞り中止

※組織名にグレーで網掛けしている団体は現在活動休止中であることを示している



図-2 豊かな自然学習園をつくる会の様子



図-3 潟舟の会の様子



図-4 かたごはんの会の様子

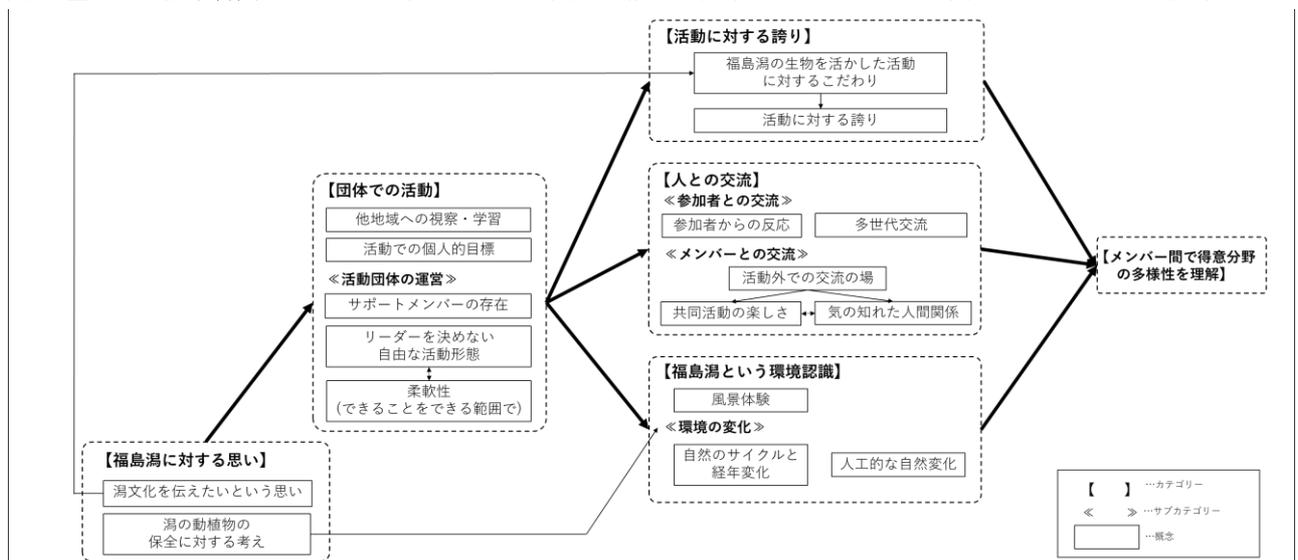


図-5 概念・カテゴリー間の関係

以降ではカテゴリーごとに実態と合わせて詳細に説明する。

b-1) 福島潟に対する思い

【福島潟に対する思い】は、活動に参加する動機になっており、今でもそれらをベースに活動している。特によろぶち文化の会、ヨシあし和紙の会、福島潟映像倶楽部では〈潟文化を伝えたいという思い〉が、豊かな自然学習園をつくる会では〈潟の動植物保護に対する考え〉を元に活動している。

b-2) 団体での活動

〈他地域への視察〉は活動初期において、活動を活気づける際に重要になっており、特に福島潟めぐみの会、ヨシあし和紙の会、鳥彫会では活動の展開においてポイントになっている。

〈活動での個人的目標〉は活動を続けるモチベーションの一つになっており、活動を通して目標を設定されているケースが多い。

また、《活動団体の運営》の中でも、〈サポートメンバーの存在〉は、福島潟めぐみの会では重要になっており、〈リーダーを決めない自由な活動形態〉と〈柔軟性〉については、多くの団体で共通している概念である。

b-3) 活動に対する誇り

福島潟の植物や食材を活用することにこだわりを持って活動することで、誇りに繋がっており、特に自ら作品や商品等を作り出す団体で多く見られた。

b-4) 人との交流

〈活動外での交流の場〉を設けることで、〈共同活動の楽しさ〉と〈気の知れた人間関係〉の構築に繋がりが、福島潟周辺での交流以外に旅行に行く団体もいくつかあった。しかし、多くの団体がコロナによって失われてしまい、新規メンバー参入の障壁になっている可能性が考えられる。

b-5) 福島潟という環境認識

〈風景体験〉は風景を享受している団体で、《環境の変化》は植物に関連する団体で見られる。また、《環境の変化》の中の概念である〈自然のサイクルと経年変化〉は、季節の循環を感じるとともに、動植物の経年辺を感じることで、〈人工的な自然変化〉に対する気づきや考えが生まれている。

b-6) メンバー間の得意分野の多様性を理解

活動を通して【メンバー間の得意分野の多様性を理解】尊重し合うことで活動参加が継続している。

(2) インタビュー調査による団体の継続性

インタビュー調査より、団体の継続性について明らかにする。また活動の実態から明らかになった活動資金収集方法・メンバー募集方法・開催頻度を表

-6 に示す。

a) 活動資金

表-6 より多くの団体に共通してみられる特徴としては、補助金は定期活動ではなく、他地域の視察や道具の購入、ワークショップの開催等の必要に応じて限定的に利用されている。また半数程度は、特に活動資金なく活動している。活動資金を得ている団体の多くは、参加費や売上として自ら調達している。このように定期的な活動に対しては、運営上必要なお金を自ら賄っている点がポイントとなる。

b) メンバー募集

活動の展開に応じてチラシや声かけ等でメンバー募集を行ってきたが、現在は多くの団体は志願した人を新メンバーとして受け入れており、団体としての積極的な募集は行っていない。興味のある人が自然な形で集まっている点がポイントとなる。また一部の団体では客からメンバーになる人も一定数いる。

c) 定期開催

ほとんどの団体が、月に一度決まった日時や毎年同じ時期に活動している点がポイントである。特に、客を呼ぶ活動については、「毎月第〇 〇曜日」という形で情報が伝播している。

d) 発起人の思いが引き継がれていること

発起人ではない人が現在中心となって活動している団体も多くあり、それらの団体は発起人の福島潟や活動に対する思いを受け継いで活動をしている点がポイントである。それらは活動を共に行う中で引き継がれているものだと考えられる。

e) 柔軟な団体運営

図-5 でも示されたように、リーダーを決めずに「みんながリーダー」として、指示されることをやるのではなく、各々がやりたいことを、できる範囲で柔軟に行っている点がポイントである。

f) 団体として対外的な年次イベントの担当制

定例活動の他に自然文化祭や潟の創作展、水生動物観察会等の年に一度のイベントで、潟舟でのヒシ採りや野鳥観察、ご飯の炊きだし等のような担当を毎年継続性している点がポイントである。

表-6 活動資金取得方法とメンバー募集方法

団体の継続性のポイント	活動資金取得方法						メンバー募集方法						開催頻度		
	補助金無	補助金有	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他	
豊かな自然学習園をつくる会															
潟舟の会															
福島潟めぐみの会															
よろぶち文化の会															
植物観察同好会															
福島潟まこも歌う会															
福島潟映像倶楽部															
福島潟ヨシあし和紙の会															
かたごはんの会															
福島野鳥の会															
鳥彫会															
ときことビクニック隊															

凡例：●-定期的活動 ▲-限定的活動

(3) 両者からみる市民活動の継続性

団体と個人の継続性の両者から市民活動の継続性について明らかになった点を一部示す。

- ・《参加者との交流》の背景には定期開催によって活動が認知されていることがあると考えられる。
- ・他のメンバーに発起人の【福島潟に対する思い】が引き継がれている団体については、発起人がいなくなった後も継続している。
- ・[柔軟性]は、個人の継続においても団体の継続においても重要であることがわかる。

以上より、団体と個人の継続性は完全に独立した関係性ではなく、互いに影響し合っていることが明らかになった。また、個人の継続プロセスに関しては、福島潟に対する思いを基にした活動を経て、個人に合った自然との関わりをメンバー間で理解することによって継続するということが明らかになった。さらに、団体の継続性としては発起人の思いが別のメンバーに引き継がれることがポイントであり、それは活動を通して育まれるものであると考えられる。以上より、都市近郊湿地である福島潟の継続性は、都市における人と自然の関係性が市民活動によって構築されているだけでなく、人と人との関係が自然を介して生まれていると推察される（図-6）。

また上記で示した継続性は、自然のサイクルを感じられる福島潟の自然環境と、市民団体を取りまとめているねっとわーくの存在という福島潟の特有の性質も影響していることが明らかになった。

5. 結論

本研究では、文献調査、市民活動団体へのインタビュー調査、活動メンバー個人へのアンケート調査から、コロナ禍を経た市民活動の実態と活動の継続性について明らかにした。

まず市民活動の実態について、コロナ禍は休止した団体もあったが、参加者等との関わりがない団体においてはコロナ前と変わらず活動を続けていた。

そして、活動の継続性については、個人の活動参加の継続性と団体の継続性より、都市近郊湿地である福島潟における市民活動の継続性は、都市におけ

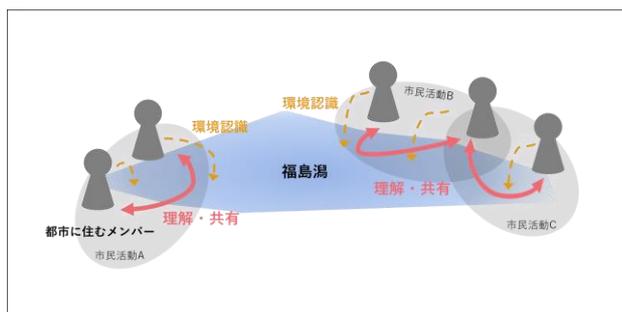


図-6 福島潟を介した人と人との関係性

る人と自然の関係性が市民活動によって構築されているだけでなく、人と人との関係が自然を介して生まれていると推察される。

一方で、2023年度でねっとわーくによる指定管理の終了により体制が大きく変化するため、今後は新たな指定管理者との連携が重要になってくる。そこで市民活動が今後どのように対応していくのかを把握することで、次のフェーズの福島潟を捉えることができると考える。また、本研究で得られた成果は、指定管理者が変化した後の市民活動の安定した継続にも寄与すると考えられる。

<参考文献>

- 1) 大熊孝：洪水と水害を捉えなおす 自然観の転換と川との共生，農山漁村文化協会，pp.228-247，2020。
- 2) 内閣府 NPO ホームページ：認証・認定数の遷移，最終閲覧日 2024.1.21，<https://www.npo-homepage.go.jp/about/toukei-info/ninshou-seni>。
- 3) 「新型コロナウイルス」NPO 支援組織社会連帯 (CIS)：「新型コロナウイルス影響下における NPO 支援センター調査」報告書，2021。
- 4) 羽鳥剛史，片岡由香，尾崎誠：市民活動の持続可能性に関する心理要因分析，土木学会論文集 D3 (土木計画学)，Vol.72，No.5，pp.407-414，2016。
- 5) 内山瑛斗：都市近郊湿地における市民活動の実態と役割—新潟県福島潟を対象として—，早稲田大学大学院修士論文，2021。
- 6) 藤澤浩子：自然環境保全分野における市民活動とその長期継続要因，ノンプロフィットレビュー，Vol.10，No.1，pp.37-48，2010。
- 7) 山村美保里：世代を超えて持続する市民活動の長期継続要因に関する研究—下諏訪町湖浄連を事例として—，土木学会論文集 D1，Vol.75，No.1，pp.1-11，2019。
- 8) 上村将人，十代田朗，津々見崇：杉並区における地域づくりに関わる地域活動団体の活動場所と交流に関する研究，都市計画論文集，Vol.51，No.3，pp.201-208，2016。
- 9) 藤原誠，室田昌子，手嶋裕，高野修一：遠郊外住宅地の多世代間交流に向けた世代間意識の違いと交流可能—季美の森住宅地を対象として—，都市計画報告集，No.14，pp.347-350，2016。
- 10) 佐々木葉，安達幸輝，外山実咲，橋本航征，渡邊拓巳，小澤広直：新潟市における潟をめぐる市民活動の特徴，土木計画学研究・講演集，Vol.57，論文番号 21-04，2018。
- 11) 渡邊拓巳，佐々木葉：新潟県福島潟における環境整備目的の変遷から見た維持管理・利用活動の構造，土木計画学研究・講演集，Vol.60，論文番号 17-01，2019。
- 12) ビュー福島潟：福島潟の歴史，最終閲覧日：2023.7.14，<http://www.pavc.ne.jp/~hishikui/history.htm>
- 13) 新潟市潟のデジタル博物館 HP:福島潟，最終閲覧日 2023.11.12，<https://www.niigatasatokata.com/learn/fukushimaimagata/>
- 14) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー論，現代社会学ライブラリー，2014。